林芙美子・中国大陸への旅と自己形成
—『哈爾賓（ハルビン）散歩』を中心に—

王　有紅

Fumiko Hayashi‘s trip to china and her self- development
— Based on her travel journal Harbin Walk —

WANG Youhong

はじめに

日本の近代文学史において、林芙美子は無視できない重要な作家の一人である。一方、中国の読者にとっては、戦争中にペン部隊の一員として「漢口一番乗り」を果たした戦争協力者というイメージが強く、林芙美子が実際にどのような作品を書いたかはほとんど知られていない。

林芙美子は生涯で８回中国に渡り、各地を旅している（うち一回は中国を経由して渡欧）。彼女はなぜ中国に関心を寄せたのだろうか。また、当時の中国はどのように彼女の眼に映ったのか。周知のように、『放浪記』の作家として出発した林芙美子にとって「旅」は一生のテーマであり、生活そのものである。いわば「旅」あるいは「放浪」が、彼女を作家にしたと言っても過言ではない。

本稿は、林芙美子の最初の中国旅行の際に書かれた二つの紀行文「哈爾賓散歩」[注1]、および「愉快なる地圖—大陸への一人旅—」[注2]を取り上げ、当時のテクストを丁寧に読み直すことによって、彼女の「放浪／越境」という自己形成スタイルを再評価することを目的としている。

また、本稿のもう一つの特徴は、「ツーリズム」をキーワードとした当時の時代背景への視点である。すなわち、張作霖爆殺事件（1928 年）から「満州国」建国（1932 年）を挟み、日本の中国大陸への関心と関与が大きく高まった 15 年間（1925 ～ 40）は、日本からの視察旅行や修学旅行などの団体旅行が盛んに行われた時期であり、いわゆる「鮮満ツーリズム」の最盛期だったとされる。林芙美子の中国への旅はちょうどこの時期と重なる。本論では、こうした同時代の動向をふまえ、林芙美子の「女一人旅」がもつ、多様な意味と独自性を明らかにしたい。

1　初出：『改造』1930 年 11 月。以下、文中の引用はすべて林芙美子紀行集『下駄で歩いた巴里』（編者：立松平和　岩波書店発行　2003 年 6 月 13 日刊）に拠る。
2　初出：『女人藝術』1930 年 11 月。

1．何故中国大陸なのか

前述のように、林芙美子は生涯で８回中国に渡っている（旅程は脚注３を参照）[注3]。ここでは、林芙美子の初めての海外渡航がなぜ中国大陸だったのかを考察してみたい。

大きくは以下の三つの理由が考えられる。第一は大正期の「支那趣味」の流行、第二はいわゆる「満州旅行ブーム」とそれに伴う旅行記などの出版物の需要の高まり、第三は、文壇作家たちの渡満から受ける直接、間接の刺激、影響である。まず「支那趣味」の影響から見てみよう。

(1)「支那趣味」からの影響

「支那趣味」という言葉が生まれたのは、日本の近代化の進んだ大正期のことであり、江戸以来の漢学的な教養とは全く別の文脈からである。この時期には、明治時代の極端な「脱亜入欧」の風潮に対する反動として、中国文化、大陸に対する興味が日本人の間にひろがった。

西原大輔の定義によれば、「支那趣味」とは「大正時代を中心とした、中国文化に対する異国趣味的関心の総体」[注4]を指す。これはかなり広い定義であって、むしろ何も限定するところがないように見える。

すなわち、「支那趣味」は文学作品のみならず、美術や建築、さらには生活様式全般を含むものであり、必ずしも言語による表現を意味しない。また文学においても、小説や随筆、紀行文といった幅広いジャンルにまたがる現象である。「支那趣味」の内実はきわめて多様であり、そこにはオリエンタリズムの要素もあれば、江戸時代以来の漢学の伝統も存在する。さらには、異国趣味そのものへの違和感が表明される場合もある。この混沌とした文化現象の総和が「支那趣味」なのである[注5]。

そこには、むろん明治以来の国権思想や帝国主義的な要素もここに含まれる。しかし、ここでまず確認しておきたいことは、「支那趣味」とオリエンタリズムが、必ずしも同義ではないという点である。すなわち、「支那趣味」は、「近代日本という自国の文化に対するかすかな嫌悪感と、日本よりもはるかに長い歴史を持つ中国という他国の文化に対する過剰な思い入れとが複雑に入りくんだ産物」なのである[注6]。

大正作家と中国との関連を言うとき、すぐに思い浮かぶのは谷崎潤一郎、佐藤春夫、芥川龍之介等といった作家であるが、川本三郎の指摘によれば、これら大正期の作家たちのあいだには「支那」へと向かう共通の「コミュニケーションの回路」が存在していた[注7]。すなわち、大

---

3 1. 1930年（昭和５年）８月20日～９月25日。『放浪記』の印税でハルビン、長春、奉天、撫順、金州、三十里堡、大連、青島、上海、杭州、南京、蘇州等を旅行した。
2. 1931年（昭和６年）11月～昭和７年６月。朝鮮、満州、シベリヤ経由で渡欧、主としてパリに滞在。
3. 1932年（昭和７年）７月。ヨーロッパからの帰途、上海に寄り魯迅と会う。
4. 1936年（昭和11年）10月。自費で満州、山海関、北平へ、スケッチ旅行中の夫手塚緑敏と北平で交流。
5. 1937年（昭和12年）12月～昭和13年１月。南京視察旅行。南京陥落に際し、「東京日日新聞」（現「毎日新聞」）の特派員として上海、南京へ。
6. 1938年（昭和13年）９月～12月。「漢口一番乗り」。内閣情報部「ペン部隊」の一員として上海、漢口へ。
7. 1940年（昭和15年）１月５日～２月３日。創作取材のため北満旅行。安東、長春、牡丹江、佳木斯、宝清、綏芬河などを回る。宝清で協和会主催の座談会に参加、陸軍病院で慰問講演等を行い、佳木斯の開拓団も参観した。
8. 1941年（昭和16年）９月。満州国建国10周年に際し、大仏次郎、佐多稲子、横山隆一と一緒に、銃後文芸奉公隊の一員として朝日新聞社の飛行機を乗って、満州へ慰問講演旅行。

4 西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム』中央公論新社、2003年、21頁。

5 注４に同じ。

6 注４西原、21頁。

7 川本三郎『大正幻影』岩波現代文庫、2008年、182頁。

正期は、自由主義や民主主義、ヒューマニズムなど、西欧の文化や思想が盛んに取り入れられた、いわゆる「大正教養主義」の時代であるが、これらの作家たちはいずれも泰西文化の教養とともに漢学の素養も深く、いわゆる「支那趣味」を持つ新世代の作家として知られている。

こうして、日本作家たちが次々と中国を訪れる一方、中国の日本留学ブームもこの時期に起きた。魯迅 (1902 年) はじめ、周恩来 (1906 年)、周作人 (1906 年)、郭沫若 (1914 年)、田漢 (1916 年) 等中国の政治 · 文化 · 経済など各方面にわたる担い手の多くは、こうした大正日本の教養主義を一身に受けた日本留学経験者であった。すなわち、大正期は、中日知識人の交流が盛んな時期でもあったのである。

前述のように、「支那趣味」は文学界のみならず、支那料理、支那模様、支那映画、支那劇等々の多様な分野にその影響が及んでいる。たとえば、1924 年 10 月 19 日付の『読売新聞』と『朝日新聞』には、左團次が満鮮巡業の終了後、北京を訪問し、最後に「支那服」姿で日本に戻ったという記事がある[注8]。また、川本が端的に指摘するように、江戸川乱歩の『一寸法師』の中で上海帰りの明智小五郎が「支那服」を着ていたのは、「支那趣味」が単に古さへの回帰だけではなく、当時のもっとも先端的なファッションだったからである。その意味で「支那趣味」はモダニズムでもあった[注9]。

（2）「満州旅行ブーム」と出版物の需要

二つ目の理由は、「満州旅行ブーム」である。

林芙美子が初めて上京したのは 1922 年、『放浪記』の連載開始が 1928 年である。この 7 年の間には 1923 年の関東大震災があり、震災後の東京がモダン都市へと変貌していく時期と重なっている。東京の近代化が急激に進んだこの時期はまた、国内外の旅行ブームが起こった時期でもあった。

1919 年、日露戦争によって勝ち取った戦利品の南満州鉄道株式会社（以下、満鉄と略称）と従来の朝鮮半島縦断鉄道である朝鮮鉄路が直接連結し、「朝鮮 · 満州ルート」による日本と中国の連絡運輸がますます容易になった。これを契機に国内の旅行ブームが朝鮮半島から大陸へと延長、拡大され、「満鮮ツーリズム」ともいうべき事態が展開していくことになる。

森正人『昭和旅行誌』によれば、それまで旅行は一般的なものでなかったが、鉄道の整備やメディアの発達などにより「旅」がより身近なものとなったため、新中間層の観光旅行が可能になったとされる。中国大陸は、普通の日本人が体験しうる海外旅行のなかで最も身近な地域となったのである。

1906 年、朝日新聞社がイベント戦略として企画した「鮮満旅行コース」は、わずか五日間ですべて満員となってしまった。『朝日』社告も「実に意外の好況」と認めている通り、朝日新聞社としても予想以上の大反響であった。1926 年までに、この視察旅行に約 250 組、9000 人が参加し、訪満している[注10]

また、1924 年 4 月に創刊された『旅』からも当時の状況が伺える。『旅』は、1924 年から 2012 年まで発行されていた日本の代表的旅行専門誌（創刊時の出版社は日本旅行文化協会）

8　劉玲芳『「支那服」の流行；1920 年代の新聞記事から』日本語・日本文化研究、2016 年、103―114 頁。
9　注 6 に同じ。192 頁。
10　有山輝雄『海外観光旅行の誕生』吉川弘川館、2002 年、31 頁。

で、同年 12 月号は、「満鮮号」として満州と朝鮮半島への旅を特集している。これが最初に組まれた特集であった。目次を見ると「鮮満を自己の生活にとりいれて」から始まり、「満蒙の開発」「車窓から鮮満見物」などの記事が並び、全 92 ページのうち 65 ページが「鮮満」に関する 16 件の記事でしめられている。[注11] さらに、その目次には満州のハルピンから朝鮮半島にかけての都市の交通網を示す地図が続く。

鮮満旅行記の出版は 1925 年から 1940 年頃に大きく集中しており、それ以前の時期については散発的に小さなピークがあるに過ぎない。張作霖爆殺事件 (1928 年) から「満州国」建国 (1932 年) を挟み、満州への日本の関心と関与が大きく高まった 1925 年から 1940 年までの 15 年間が、鮮満ツーリズムの最盛期であったといえる。

林芙美子が中国を訪ねた時期は、1930 年から 1941 年であり、米家泰作の推計による上記の鮮満ツーリズムの最盛期および出版のピークとちょうど重なっている[注12]。詳細は米家論文に譲るが、この時期の出版点数の増減は、読み物としての鮮満旅行記の需要をほぼ正確に反映していると考えられる[注13]。

以上見て来たように、林芙美子が初めの海外旅行先に中国大陸を選んだ背景として、近代ツーリズムの進展と「鮮満旅行ブーム」、そしてそれに伴う旅行記の需要の高まりがあげられる。ベストセラー『放浪記』の印税で大陸に渡った林芙美子は、読者が望む鮮満旅行記の需要を敏感に読み取っていたと思われる。

(3) 作家たちの渡満

歴史的にみれば、多くの日本人が中国への関心を持ち、足を踏み込んだのは日清 (甲午) 戦争 (1884 年)、日露戦争 (1904) 年の戦勝後であると思われる。日本人にとって遠く、いまだ知られざる謎の国であった中国は、「戦争」によって身近になった。こうした時代の趨勢を背景として、作家たちも自らの目で中国の様子を確かめようと、次々と中国に進出するようになる。

すでに、日露戦後間もないに時期に徳富蘇峰、夏目漱石といった人々が大陸に渡り、旅行記や小説を発表[注14]しているが、とりわけ大正になると大陸への渡航者が急増した。

谷崎潤一郎が初めて中国大陸を訪れたのは 1918(大正 7) 年のことである。帰国後、『秦淮の夜』(1919 年)、『蘇州紀行』(1919 年)、「蘆山日記」(1919 年)、「天鵞絨の夢」(1919 年)、「美食倶楽部」(1919 年) などを発表した。谷崎は、この旅の途上、奉天の木下杢太郎の家に十日ほど滞在している。木下杢太郎は、かつてスバル系の詩人と『方寸』の画家たちが興した「パンの会」の一員である。

翌 1919(大正 8) 年には、佐藤春夫が台湾や福建省を旅行した。また、芥川龍之介は、1921 (大正 10) 年に大阪毎日新聞社の海外特派員として上海に渡った。芥川は、約 5 ケ月にわたって上海、南京、九江、漢口、長沙、洛陽、北京、大同、天津などを回り、「支那游記」「上海游記」「北京日記抄」などの旅行記を発表した。金子光晴もまた、1926(大正 15) 年に谷崎

---

11 森正人『昭和旅行誌―雑誌『旅』を読む―』中央公論新社、2010 年、74 頁。
12 米家 , 泰作「近代日本における植民地旅行記の基礎的研究：鮮満旅行」『京都大学文学部研究紀要』、2014 年、324 頁。
13 同上。
14 徳富蘇峰『支那漫遊記』民友社、1917 年。夏目漱石「満韓ところどころ」(1909 年 10 月 – 12 月、『朝日新聞』／『四篇』収録)。

潤一郎の紹介状を携えて上海に渡っている。

さらに、横光利一は芥川龍之介に上海をみておくよう強く促され、1928(昭和3)年に上海に赴いた。横光は約1ケ月の中国滞在のほとんどを上海で過ごした後に帰国、同年の11月から小説「上海」を『改造』に連載した。

後に佐藤春夫は、谷崎や芥川が中国に行ったのは「自分の発案」[注15]によると述べている。こうして、1910年代から20年代にかけて、作家たちは次々と中国に渡り、互いに刺激し合いながら「支那趣味」の作品を発表していった。そこには、佐藤春夫の「発案」から横光利一の上海行にまでつながる、文士たちの「コミュニケーション回路」[注16]が、たしかに存在していたといえるだろう。

西原大輔は、これら「支那趣味」の共通分母はロマンティシズムだと指摘する[注17]。さらに、西原は、彼ら「耽美派」のスタンスは、「支配層」の間近に身をおいて、彼らの庇護を受けつつも、一定の距離を保ち、新たな美の発見を求めて、植民地、半植民を旅することであり、悠然と中国とを巡り、「漫遊」「趣味」といった立場で中国を描いた[注18]と指摘する。

これらの作家たちに対し、林芙美子の旅はどのような旅だったのだろうか。同じ女性作家という視点からみれば、1928（昭和3）年に渡満した与謝野晶子・寛夫妻がいる。昭和初め日本の作家たちの多くは、満鉄の招待で満州旅行に赴いたが、与謝野夫妻もその一例である。帰国後、与謝野夫妻は『満蒙遊記』[注19]を共著し、晶子は「満蒙の歌」を書いた。与謝野夫妻のこの旅行については後述し、芙美子の「女一人旅」と比較してみたい。

また、林芙美子の周辺では、18歳の平林たい子が1923（大正12）年にアナーキストの山本虎三を追って朝鮮、満州、大連を放浪している。後に芙美子とたい子は、下積み時代の盟友となる。たい子は、自らの体験を小説「施寮室にて」に書き、『文芸戦線』（1927年9月）に発表、プロレタリア作家としての文壇的評価を得た。平林たい子のこの成功は、芙美子にとって大きな刺激となったはずだ。芙美子の「放浪記」[注20]が好評を得て、文壇登場への道が開かれたのはこの翌年（1928）のことである。

当時の文壇作家のあいだには、海外渡航への願望が広く存在しており、深尾須磨子のパリ遊学（1925年）、湯浅芳子・中條百合子のソビエト留学（1927年）、吉屋信子・門馬千代の渡欧（1928年）などが、華やかな話題として取り上げられる時代の雰囲気もあった。ちなみに、芙美子の中国出発の前年にあたる1929（昭和4）年には、芙美子の処女詩集『蒼馬を見たり』（南宋書院、1929）の出版費用の五十円を寄付してくれた松下文子が、夫と共にベルリンに旅立っている。

1930（昭和5）年8月、『新鋭文学叢書』の一冊として刊行された『放浪記』がベストセラーとなり、ようやく念願の中国旅行が実現することになる。すでにこの年の1月、林芙美子は生田花世、望月百合子らと約一か月の台湾旅行をしているが、この時は総督府の招待という枠内での団体旅行であり、芙美子の望む自由な個人旅行ではなかった。

---

15 佐藤春夫「からも因縁」『佐藤春夫全集』第11巻、講談社、1969年、574頁
16 注6に同じ。139頁。
17 注4に同じ。
18 同上。
19 与謝野寛・晶子『満蒙遊記』大阪屋号書店刊、1930年。
20 林芙美子『放浪記』新潮社,1965年。

同年８月中旬、林芙美子は『放浪記』の印税を手に、約二か月の中国大陸の単独行に出発する。文字通り「女一人の旅」だった。

以上見て来たように、林芙美子の中国大陸への旅は、大正から昭和初期にかけての「帝国の版図」の拡大に伴う近代ツーリズム空間の成立を背景とし、大正文人たちの「支那趣味」や中国旅行熱の影響、また身近な友人である平林たい子を始めとする女性作家たちの海外渡航からの刺激など、いくつかの条件、理由により行われたと考えられる。

特に、『放浪記』がベストセラーになり、「旅」という自己表現のスタイルに自負を持ちつつあった時期である。時代の空気や流行に敏感な芙美子が、当時の出版界の動向、つまり、読者が望む鮮満旅行記の需要を読み取り、誰も書いたことのない独自の中国旅行記を書きたいという文学的な野心を持ったのは当然なことと思われる。

次章においては、実際のテクストに即して、芙美子の中国の旅を追ってみることにする。

２．満州の見聞

(１)大連の印象と歴史的背景

林芙美子は 1930 年（昭和５年）８月中旬から９月 25 日まで、約二ケ月にわたって哈爾濱（ハルピン）、長春、奉天、撫順、金州、三十里堡、大連、青島、上海、杭州、南京、蘇州などの地を歩いた。以下、『哈爾浜散歩』[注21] に沿って考察を行う。

大連の第一印象について、芙美子は以下のように述べている。

> 神戸の波止場を出て数日、雨に濡れた大連の埠頭に、私はいつもながらの無鉄砲さにやりばりもないほどな、悔いを広げずにはいられませんでした。言葉の通じない、風俗の違った土地、そして用意の旅費も手薄な私が、ウラル丸の赤切符を棄てると、いっその事、も一度赤切符を買いなおして、日本へ帰ろうかしらと、私はざんざ降りの雨に濡れながら、焦心を抱えて埠頭に立ちました。[注22]

芙美子は、８月 20 日に東京を出発し、神戸港から門司を経て８月 24 日に大連へ到着した。ウラル丸の三等客室での五日間はかなりの長時間の旅である。ここには多少の文学的な誇張もあると思われるが、大連の埠頭に一人立った芙美子の「焦心」は、偽りのない心境でもあったろう。

ここで芙美子は「満州風」という言葉を用いている。よく間違えられるが、大連は日本の租借地であり、満州国ではない。大連は 1880 年代に清朝によって作られたが、1898 年、日清戦争後、三国干渉の代償としてロシアに租借された地域である。関東州の一部として大連を租借したロシアは開発に乗り出し、当時のヴィッテ蔵相の提案により、翌年３月に街の名称はロシア語で「遠方」を意味する「ダーリニー」と改められた。

「ダーリニー」は、旅順にある軍事物資の輸送として活用され、1903 年にはヨーロッパからの急行列車の乗り入れや中東鉄道の海洋汽船の運航などにより東アジアの諸港と結ばれるよ

[21] 注１に同じ。
[22] 同上。33 頁。

うになった。さらに 1904 年 5 月には日露戦争により日本の租借地となり、その後アジア有数の港湾都市「大連」として発展したが、満州事変までは、日本人はほとんど関東州と満鉄の付属地にしか住んでいなかった。

一方、「満州」というのは、中国の「関東」にあたる地域である。つまり山海関より東、もともと清の祖宗発祥の地として、開国以来長い間、関内からの移住が禁止されていた。それが十九世紀に入り、ロシア勢力の南下に伴う軍事上の必要から、200年続いた「封禁令」が解かれ、「闖関東」と呼ばれる関内各地からの人口移入が起こった。

こうした歴史からも分かるように、そもそも中国国内でもいわば「辺彊」でしかなかったこの地域、勿論日本とっても「辺縁」にあたるこの地域は、後に中日両国にとってかかわりの深い場所になる。すなわち、1931 年の「満州事変」であり、翌年の「満州国建国」である。

芙美子は、大連駅で満鉄からパスがもらえず、一晩足止めされるが、一旅行者としては大連の短い滞在を楽しんだようだ。紀行文では触れていないが、夫の手塚緑敏への葉書の中で大連の美しさを次のように伝えている。

> 大連はすばらしくいい町です。朱色と緑の町、アカシヤの並来道を、白い馬車に乗って、カラカラ走っています。満州風は、内地の十月の風、用意したものがみなやくだちません。オーバーは持って来てよかったと思います。パスはもらいました。九月上旬ハルビンから上記のところへかへります。ここは井上[注23]で紹介してくれた家だ、元気でいて下さい。[注24]

(2) 哈爾賓の見聞

林芙美子は大連に滞在後、鉄道でまず長春に行き、モスク行きの東支鉄道に乗って哈爾賓まで北上した。この旅程は、当時の日本人旅行者のほぼ定番コースと言ってもいいだろう。

芙美子は、国際列車（東支鉄道）のすばらしい乗り心地を称賛する一方で、寝台で一人眠る心細さを以下のように記している。

> 寝台室の横の細い廊下をコツコツ渡って行くと、いまさら遠く来たものだと思わざる得ないのです。私の寝台券はナムバー十九号、寝台は一室に四つ。私の十九号の寝台には、でかい露西亜女が、雷のような鼾をしてもう占領していました。老いた列車ボーイが気長に体をゆすって起してくれたのですけれど、わざと狸寝をしていて起きてくれないのです。二階のように高い上の方の寝台に這いあがって、私はやっと旅の着物を抜いだのです。[注25]

芙美子は、見知らぬ土地で「日本人の顔は一人も見えません。支那人と露西亜人と、小数のアメリカ人らしいのと」、「どんな風にして宿を探したらいいかと思いました」[注26] 等の不安を抱えながらハルピンに着いた。

しかし、実際にハルピンに降り立つと、ロシア人運転手の「ヤポンスキーマダム！」の一声

---

23 引用文中の「井上」は、幼なじみの井上桂子。
24 久保卓哉「林芙美子哈爾賓・奉天・上海・杭州への旅―昭和 5 年初めての満州・南支　行―」『世界の中の林芙美子』芸図書館刊行、2013 年、73 頁。
25 注 1 に同じ。36 頁。
26 注 1 に同じ。37 頁。

で「小さな憂鬱」は吹き飛び、「口笛でも吹きたく」なってしまう。汚い「オープン自動車」に乗ってホテルに向かう芙美子は、「街を剪り街を剪り、がたがたなどらいぶ。舗道を行く馬車の古風さ、馭者は赤いルパシカの上に黒いチョッキ、白い馬などは、実に春は馬車に乗っての感が深い。何と云う古風な街だろう、空も美しいけれど、中央寺院の円屋根、煙草のスマート絵看板の広告、支那料理店の軒には、ぼたんばけのような紅い房が朝風に埃をキリキリ払っています」[注27] と、ハルピンに対する最初の印象を語っている。

ハルピンは大都市である。1896 年ロシアが清国に東支鉄道の敷設する際、建設資材や人員の輸送に使ったのが松花江だった。この松花江と鉄道予定地の交わる地点ということで選ばれたのがハルビンである。ハルビンはそれまでは草深い、小さな漁村にすぎなかったが、鉄道敷設の拠点となって以降急速に発展し、満州の中心となり、各国各民族が雑居する国際都市となった。

たとえば、ハルピンを代表する歴史的な大通りである「キタイスカヤ」(ロシア語で「中国人街」) にも芙美子は訪れている。芙美子によれば、キタイスカヤは「東京の銀座のようなところ」で、ロシア統治時代の西洋風の建物が立ち並び、各国の銀行や代表的な商館などが集まる「東洋のパリ」とも言われる繁華街である。楽団と踊り子のショ―や、ダンスホールを兼ねた社交場 (キャバレー) も多く存在した。

しかし、芙美子にとってはキタイスカヤの街より「傅家甸」の方が印象的であったようである。当時のハルピンは、旧哈爾濱、新市街、埠頭区、傅家甸と四つの地区に分かれており、一番活気があったのは傅家甸であった。傅家甸は、芙美子によると「歩いていると、火事のある街に行っている」(45 頁) ような地区で、日本でいう浅草といったところだろう。

「哈爾濱散歩」の冒頭で、芙美子は、「散歩のことを、上海語で、白想と云います。白想！まことに懐かしく、私の遠い散歩に、この字こそ適当なものはないでしょう」（33 頁）と書いている。「白想」は、中国語で「空想」の意味で、上海語では「遊び」という意味もある。

芙美子の「散歩」はハルピンの街の細部にまで及び、「ハルピンの景色で一番好きだったのは寺院です。寺の中へはいって行くと、どの墓にも花があふれていました」とある。芙美子が述べたのは中央寺院のことで、ハルピンの代表的な建物である。自分の目と耳を使って歩き、墓まで観察しているのはいかにも芙美子らしい。

このように異国情緒に満ちた 1930 年のハルピンだが、芙美子によるとハルピンは国際都市とはいっても「白系露人の避難民の街といった感じが強いところ」(48 頁) であった。1930 年代の『哈爾濱特別市市政報告書』[注28] によれば、当時のハルピンの人口は 34 万 3469 人、そのうち外国人は 9 万 9179 人で、中でも最も多いのはロシア人であった。一般には、ロシア革命による旧ロシア帝国からの亡命者を「白系ロシア人」と総称しているが、必ずしもロシアやスラヴ人種というわけではなく、旧帝国内に居住していたウクライナ系やポーランド系の人々、ユダヤ人なども含まれていたとされる。

紀行文の最後に芙美子は、「満州では北方がいいと思います、勿論その中にはハルピンがあるから……、また来年は冬のハルピンを見に行きたいと思っております」(53 頁) と述べ、哈爾濱への愛着を繰り返し語っている。

---

27 注 1 に同じ。38 頁。
28 哈爾濱特別市市政局『哈爾賓特別市市政報告書』、哈爾濱特別市市政局出版、1931 年。

また、『哈爾濱散歩』には、街の風景や庶民の生活の実情が細かく記されており、1930 年代のハルピンの様子を窺い知ることができる史的な資料としても貴重である。

(3)時局描写・その他

芙美子が中国を旅したのは、1931(昭和6)年の満州事変の前年のことである。「哈爾濱散歩」や「愉快な地図」には、時局についての直接の言及は見られないが、旅行中に芙美子が目にした風景について、いくつかの感想が記されている。

一つ目は、鉄道の沿線で目にした「兵隊さん」についての以下の記述である。

> 満州で強いものは、人間よりも自然です。どこへ行っても、果てしのない空と野原、ところどころの森、鉄道の沿線には、今こうりゃんが茶色に実のっています。何町おきかに日本の守備兵が、一人一人列車の窓から見えていましたが、内地の波止場でよく見た満州行きの兵隊さんが、こんな茫漠とした広い野原を背に、「鉄道を守っている立派な姿は何か胸が熱くなります」(35 頁)

引用文中の「鉄道を守っている立派な姿は何か胸が熱くなります」という記述を見るかぎり、芙美子の中に、故郷から遠くはなれた土地で任務に就く若い兵士に対する人間的な同情があったことは確かだろう。

日本国内においては、「満蒙は我が国の生命線」という言葉が高唱されていた時代である。1931 年 7 月、東京帝国大学(東京大学)の学生たちに行なった意識調査では、「満蒙(南満州と東部内蒙古)に武力行使は正当なりや」[注29] という質問に対し、88%の学生が「はい」と答えている。このことからも当時の国内世論の動向を窺い知ることができる。

ちなみに文中の「満州行きの兵隊さん」とは、おそらく鉄道守備の兵士のことである。これまで述べてきたように、1904 年の日露戦争の勝利に伴い、日本はロシアから鉄道関係の権限を譲り受け「南満州鉄道」(満鉄)を創立する。鉄道は権益のため日本守備隊に守護されていた。ここでいう「兵隊さん」は平時の守備兵であり、後の『戦線』に描かれるような日中戦争中の兵士とは異なるものである。

また、次のような記述もある。

> 昨年の東支問題があってから、支那はかなり、ハルビンの権力をとりもどしている。日本人の街は、モストワヤ(埠頭區)あたりにあるんだが、大した勢力はないらしい (46 頁)

昨年の東支問題というのは、すなわち中ソ紛争のことで、ソビエト連邦は 1929 年、満州に侵攻し、中華民国軍を破り中東鉄道の権益を確保した。芙美子が日本は「大した勢力はないらしい」と記しているのは、連日日本国内で報道にギャップがあり、そこまでの日本の影響を現地では感じられなかったということだろうか。この記述には、日本国内メディアの大げさな報道に対する軽い風刺のニュアンスも感じられる。

芙美子はさらに「易幟」の影響も目にする。

---

[29] 加藤陽子『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』新潮社、2016 年、307 頁。

支那人の野菜屋の屋上には、何を考えてか、青天白旗が長閑にヒラヒラしていたりしました。支那政府に雇われた露西亜人の巡査が、梨を噛りながら歩いています (44 頁)

1928 年 6 月 4 日、張作霖は爆殺事件で亡くした後、後を継いだ東三省 (遼寧省、吉林省、黒竜江省) の政治的軍事的な支配者であった息子の張学良は、蒋介石率いる国民政府に降伏したことを示すため、満州の五色旗から中華民国の青天白日旗に「易幟」を行った。

当時の日本の報道では、一夜にしてあたかも全満州の旗が変えられたように書かれ、外務省や日本陸軍もそれを事前に察知できなかった為、大いに慌ててしまったようである。

実は、全満州というのは過言である。なぜなら、その時張学良は全満州を抑えていたわけではなかった。おそらく青天白日旗も、張学良の軍隊と、駅や目抜き通りなどの目立つ場所だけに用いられ掲揚されたものだろう。また、日本人が住んでいたのは満鉄の駅周辺の付属地などに限られており、つまり、日本人に見せるためだけに旗を変えたということになる。農村など外の土地は無関係であった。

さらに、張学良や旅順についての以下のエピソードからも、芙美子の今回の旅行における関心の所在がうかがえる。すなわち、芙美子は、「紹介の労をとりますがと、領事館の方が云って下すったのだけれど、どうも中立軍張学良には興味がありません」と、張学良との面会を断っている。また、旅順のような戦跡にもあえて行かなかった。「日露戦争の跡も見て来たかったのですが、小心者の私は、戦争があんまり好きじゃないので、旅順の二百三高地へはわざと行かないでやめてしまいました」(46 頁) という記述は、韜晦というよりむしろ芙美子の本音ではなかったろうか。

以上にみてきたように、少なくともこの時点での旅行の目的は、当時注目されていた満州という場所を、自分の目で確かめ、体験したいということだったのではないかと思われる。今後の検討課題としたい。

3．女一人の旅

(1) 旅行の主体をめぐって

これまで、作家、芸術家を中心に考察を進めてきた。しかし、本節では当時の植民地旅行の「主体」という、やや異なる視点から芙美子の旅の性格を考えてみたい。

先述の米家泰作[注30]は、当時の植民地ツーリズムの主体を以下の 8 つの類型に分けている。すなわち①実業家の旅、②教員の旅、③修学旅行など学生が主体の旅、④慰霊や布教など宗教家の旅、⑤役人や政治家の旅、⑥参加募集型の団体旅行 (ツアー)、⑦作家や芸術家の旅、⑧その他 (属性が不明な場合) である。

米家によれば、この 8 つの類型のうち、コロニアルツーリズムを構成する特に重要な類型は「実業家の旅」であるという。これら実業家の旅は、「視察」を名目として行われ、経済界、業界の関心に沿った旅行プランが組まれる。そこに炭鉱や農場、ダムといった産業施設への訪問が含まれるのは当然だが、同時に戦跡その他の史跡、温泉や歓楽街への訪問も組み込まれていることが多く、実際には「植民地の経済視察」と参加者の「親睦と観光」を抱き合わせるか

[30] 注 12 に同じ。325 頁。

たちで、「周遊団体旅行」として行われる実態があったとされる[注31]。

こうした日本人旅行者にとって、哈爾濱観光の一つの目玉は、ロシアの影響力を感じさせる哈爾濱の異国的な情緒であり、歓楽街でロシア人ダンサーを見物することだった。芙美子の『哈爾濱散歩』の中にも、「ニツツア」という「日本のお女郎屋のようなところ」についての描写が出てくる。「日本と云うものは、こんなものを見物の一つに数えているのかも知れませんけれど、千代紙箱のように壁をペンキでペタペタ塗ったあくどい部屋で、人絹のギラギラしたハッピィコートを着た露西亜女がかっぽれを踊る」、「味も実もない遊び場所」、「彼女たちは煙だ」等の描写には、芙美子のジェンダー的な批評性と同性への苦い共感がうかがえる。

米家は、対象とした鮮満旅行記の特徴を整理するにあたり、これらほとんどが男性執筆者によるものであること、女性が含まれていても、夫ないしは男性の「随伴者」という立場だったこと等、「コロニアル・ツーリズム」があくまで「男（たち）の旅」という性格を持っていたと述べ、そのジェンダー・バイアスを指摘している。

これは、教員、修学旅行生などが主体となった旅行についても同様である。日露戦争後の1906（明治39）年に文部省と陸軍が奨励することによって、鮮満への修学旅行が盛んになり、その後いくつかのピークを迎えるが、1920（大正9）年～1940（昭和15）年の最盛期においても、女学生による旅行記は、女子高等師範や選抜された女性教員による視察旅行を除けば、わずか4点に過ぎない。

さらに、「団体旅行」という旅の形態に特有な制約や条件がある。当時の旅行記事を見ても、旅行者たちが現地の人々と接する場面はきわめて少ない。宿泊地等に到着すると、現地在住の日本人が歓迎に出迎え、彼らの案内で史跡などを見て歩くのが「周遊団体旅行」の典型的な行動パターンである。

したがって、実際に満州や韓国の人々と接するのは、史跡や日本人経営の宿舎などに赴く途中にちょっとした買い物をしたり、ひやかしに食事をしたりする程度であり、このように隔離された旅行者たちが、買い物や食事以外に現地の人々を見るのは、街路ですれ違うか、列車の車窓から眺めるかであった。[注32]

また、多くの旅行者たちの関心は日本軍の戦跡にあり、もっぱら自らの歴史を参照する目的で満州韓国の各地を見て回った。現地の人々にとって重要な歴史的意味を持つ場所は、日本人旅行者からはまったく別の視点から眺められることになり、また現地の人にとって特別の意味をもたない小さな高地が、日本人旅行者のもつ物語においては日本軍激戦の二百三高地として感涙をもって見る聖地となったのである。[注33]

ここで、林芙美子より二年前に満州を訪ねた与謝野晶子・鉄幹夫妻の例を改めて見てみよう。

1928年5月5日から6月17日まで与謝野晶子は夫寛とともに、南満州鉄道株式会社(以下、満鉄と略称)の招待で、東北地方(「満州」・「内蒙古」)を旅行した。旅程の概略は次の通りである（以下、当時の地名で記す)。7日間の大連滞在後、金州、熊岳城、大石橋、営口、千山、湯崗子、遼陽、釣魚台、安東、五竜背、鳳凰山、内蒙古、洮南、斉斉哈爾、哈爾濱、寛城子、吉林、長春、公主嶺、撫順、奉天とめぐって大連、旅順を再遊している。かなり長い道程であ

31 同上。329頁。
32 注9に同じ。77頁。
33 同上。74頁

る。満鉄の招待であるから当然だったかもしれないが、「豪遊」あったと言える。

また香川信子によれば「川辺のサロンには、小石の中に瑪瑙が交って散在しており、二隻の船を仕立て嫩江に遊ぶ。一級の中国料理、酒をふるまわれ、最高級の織物などの土産と、行き帰りは『一団の兵士に捧銃の礼』を受けるという待遇であった」[注34] という。芙美子のように、「女性」で、しかも「一人旅」がいかに稀有なことだったが分かるだろう。これらの詳細は後に寛との共著『満蒙旅行記』として刊行されるが、もちろんこれは「国策会社」である満鉄の広義の宣伝工作であった。

次節においては、林芙美子の「女一人の旅」の内実を、テクストに即して具体的に見ていくことにする。

（2）女一人の旅

与謝野夫妻の招待旅行とは対照的に、芙美子の旅行は質素なものだが、現地の生活感を直接に感じられる芙美子らしい旅であった。

私の泊まったのは、埠頭区田舎の北満ホテル、北向きのバサール市場の軒を見はらした金三円也の部屋。ベッドは少々背が高すぎます。(中略) このホテルの階下はキャバレーで夜明けまで唄声がきこえています。ここでは二、三十銭も出せば、キタスカヤあたりで、素晴らしいアベード (昼食) が食べられます。辻々には可愛らしい小店があって、酒も煙草も売っているし、煙草は数えきれないほど、豊富な種類があります (38 頁)

ただし、もちろんのこと、この旅には多くの協力が必要であった。大連の宿の手配をしたのは、林芙美子の幼なじみの井上佳子であり、大連からハルピンへ行く切符の手配をしたのは南満州鉄道の助役の西川、また、傅家甸を案内したのは、朝鮮銀行の小串とヤパンスキームゼイ（領事館）の柏木氏などである。しかし、やはりそれでも、一人旅の苦労は尽きない。

第一奉天のツウリスト・ビュウロウなんて、あってもなくても同じ事だと思いました。領事館で聞いた通り、俥をかって、相談に行ってみますと、木で鼻をくくったような冷やかな人情、女の一人歩きを気味悪がったのかもしれないけれど、お一人の場合は案内料も高いし、自動車でまわっても拾円近いですよ。ツウリスト・ビュウロウには満鉄から金が出ていると聞いたですけれど、こんな冷たい案内所ならむしろ無い方がいいと思いました。(49 頁)

行き場のない芙美子は駅の近所の日本寿司屋に入るが、「寿司を食べて、茶を呑んでいると、ぼんやり涙がこぼれそうになる。「女の一人歩き」への惨めな待遇は、招待旅行で「貴賓」扱いの与謝野晶子とは対照的である。

芙美子は、「幸ひ (満鉄の) 助役西川氏の好意がなかったら、私はハルピンまで行けたかどうか」、さらに、「大連の満鉄本社では、長春までのパスを貰うのに、個人の場合は駄目だと云う事で、やむなく、一晩大連に泊り、朝、十河理事にお願いして、やっと、長春までの二等切符を貰いました。あの侘しい気持ちとくらべて、夜明けの長春駅で、しかも汽車の出るまぎわ、

[34] 香山信子「与謝野晶子の「満蒙遊記」」『近代日本と「偽満州国」』不二出版、1997 年、283 頁。

何も言わないでパスを下すったお心づかいを、私は一生忘れない」(36 頁) という。つまり、芙美子のような個人旅行はやはり、想像以上に難しかったようである。

また、それ以前に、女性の一人旅そのものがかなり珍しい時代である。

例えば、一九二〇年代に書かれた「旅とモダンガール」という記事の中には、女性の旅は「単なる如何なる男性にでも引連られて行く旅、自発的の旅ではない」という記述がある。「モダンガール」でさえこのような実態であれば、一般の女性の旅の困難は推して知るべしである。森正人は、このような記事が『旅』に掲載されること自体が、「『旅』の男性中心的な側面をほのめかしていると指摘している。

一方、林芙美子の旅は、自ら旅のルートを切り拓き、自身の目と耳を使って現地の人々の生活の中に入っていく女一人の旅である。

かつて芙美子は、「私には、浅草ほど愉しいところはないのだ」と書き、「八ツ目うなぎ屋の横町」で、「三十銭のちらし寿司をふんぱつ」し、「茶をたちふく飲ん」で、「店の金魚」を眺める楽しみを語っていた（「放浪記」）[注35]。

旅先でも放浪記の芙美子は健在だった。哈爾濱の町角でも芙美子は、土地の人々に混じって庶民の料理を満喫している。

> キタスカヤの通りの料理店で、レコードを聞きながら、銀の鍋から、スープを皿にすくって、食べる味、とても忘れられない。そのスープの中には、大きな肉のかたまりや、馬鈴薯、キャベツ、色々なごった煮、バンは食べほうだいそして、お勘定は四十銭、日本金にすると、二十三銭あまり、何たるすばらしい事でせうか！[注36]

ここには、人々の中に溶け込み、ささやかな日常の中の祝祭を楽しむ芙美子の生活力が感じられる。

さらに、芙美子の視点は中国の百姓や子供たちにも向けられる。

> 朝起きると、新聞も、清潔な朝の御飯。郊外の家を覗くと、紅茶とパンと瓜を食べた子供は、朗らかにうたを唄って学校に行っています (39 頁)

これらの体験は、気ままに時間が使える個人旅行だからこそできる体験だろう。「郊外の家を覗く」好奇心も芙美子らしい。

むろん『放浪記』の作家らしく、カフェーの女給らへも温かい目を向ける。

> 私の泊っているホテルの前が、キャバレータベルナ。まず三流どころだけれど、一ドルも踊り子に握らせてやると、いつも親切なパアトナになってくれます。チチハル生まれの踊り子が、ステージの隅で唄い出しますと、どんなに騒いでいる踊り子でも、シィッシイッと叱声をあげて、落ちついて耳をかたむけています (43 頁)

---

35 林芙美子『放浪記』新潮社 ,1965 年。
36 注 2 に同じ。55 頁。

さらに、奉天の俥屋のニイヤンとの次のようなやりとりには、「人種」や言葉を超えた人間的な距離の近さが感じられる。

ニイヤンがとても暑そうなので、少々漫々を連発して俥を止め、アイスクリームを御馳走してやりました。私にどうして食わないかと云うから、舌を出してゲッとしてみせたら、腹をさすって眉をひそめて心配してくれる。人種が変わってもこんな優しい人情もあります。私はこのニイヤンに沢山お金をやりたいと思いました。(43 頁)

ここでのニイヤンへの気遣いには、当時の日本人の通弊であった差別意識、優越意識は見られない。また、このあと芙美子は「陵の入口で待っているニイヤンと、サイダーを分けあって呑」むということになるのだが、この行為も、同情というよりは、底辺に生活する民衆への共感が自然な動作として現れているように感じられる。

林芙美子の満州の旅は、まさに当時日本人が目指した、「満州に於ける支那人」の生活、事情をよく研究し、その「真相」を理解する[注37]という本来の主旨に相応しい旅であった。

言葉も分からぬ土地で馬賊の噂に耳をそばだて、治安の悪さを警戒しつつ大きな旅行鞄を「両足にはさん」で人力車に乗る、という必死なユーモアさえ漂う芙美子の「三等旅行」は、エリート世界とは全く無縁な旅だったと見える。

また、この旅には当然ながら「冒険記」の取材という意味もあっただろう。芙美子にとって「満州」は、不安とスリル、希望と可能性が混在する魅力的な地であったに違いない。

終わりに

紀行文の終末部の次のような一節は、「放浪記」を彷彿とさせるものがある。

大連の埠頭で、あんなに日本へ帰りたい事なぞ、ケロリとして、上海行きの苦力船に乗った。勿論三等旅行だ。満州は金のない旅だけに、とてもいいところだった。[注38]

「放浪記」の印税をつぎ込んだ中国への旅は、芙美子にとってかつての「放浪」の続きなのだろう。

『放浪記』には思想がない、と当時のプロレタリア陣営から批評されることもあった。しかし、芙美子自身は「放浪記」は一人の「人間の書」であり、「私はそっと誇りたい気持ちもある」[注39]とひそかな自負を語っている。林芙美子の作品にはいつも一人一人の生活がある。生活があってこその思想であり、誇りでもある。これは彼女が自身の生活の中から汲み上げた独自な思想・文学と言えよう。

芙美子は、生身の身体や精神から獲得されるものを大事にした作家である。それは、長春から奉天に向かう車中で、夫の手塚緑敏宛てに送った葉書の一節、「こんどの旅は私をえらくしました。ロシア語支那語、片言云へます」からも窺える。

---

37 注 10 に参照。
38 注 1 に同じ。53 頁。
39『林芙美子全集　第五巻』あとがき、文泉堂、1977 年。

海外へ出るということは、日本の制度から自由になれる可能性の一つである。林芙美子にとって〈旅〉とは、自分が育った文化的な構造や価値観という「内部」から離れ、未知の土地や関係性という不安定でリスクの多い「外部」に身を晒すことによって、自己を見つめ、ひとり人間として学び、成長していくことであった。言いかえれば、芙美子が、自分が何者であるかということを考える時の基軸となる自己形成のスタイルが〈旅〉ないし〈放浪〉だったのではないかと考えられる。

「生きるか死ぬるか、とにかく旅へ出たい」、あるいは「死んでもいい気持ちで旅をした」という林芙美子にとって、「旅」はただの観光や遊びではなく、生きる覚悟そのものの表現だった。事実、芙美子は自分の旅行記がそうしたものとして読まれることを充分に意識しており、「三等旅行」の意地と姿勢を最後まで貫いた。この意味で、今回の中国大陸へ旅もまさに「放浪記」の延長線上にあるといってよいだろう。

後に、ペン部隊の一員として戦争に協力し、「漢口一番乗り」を果たす芙美子の行動や言説と、今回の中国旅行におけるそれとの違い、連続するものと断絶についての考察は、今後の課題としたい。

主要参考文献：

1. 有山輝雄『海外観光旅行の誕生』吉川弘川館 ,2002 年。
2. 久保卓哉「林芙美子哈爾賓・奉天・上海・杭州への旅―昭和 5 年初めての満州・南支行―」『世界の中の林芙美子』芸図書館刊行，2013 年。
3. 川本三郎『大正幻影』岩波現代文庫 ,2008 年。
4. 加藤陽子『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』新潮社 ,2016 年。
5. 香山信子「与謝野晶子の「満蒙遊記」」『近代日本と「偽満州国」』不二出版 ,1997 年。
6. 徳富蘇峰『支那漫遊記』民友社 ,1917 年。
7. 夏目漱石「満韓ところどころ」(1909 年 10 月 – 12 月 ,『朝日新聞』／『四篇』収録)
8. 西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム』中央公論新社 ,2003 年。
9. 林芙美子「哈爾濱散歩」『下駄で歩いた巴里』初出：『改造』1930 年 11 月，岩波書店発行 ,2003 年 6 月 13 日。
10. 林芙美子『放浪記』新潮社 ,1965 年。
11. 林芙美子『林芙美子全集　第五巻』あとがき，文泉堂，1977 年。
12. 森正人『昭和旅行誌―雑誌『旅』を読む―』中央公論新社 ,2010 年。
13. 与謝野寛・晶子『満蒙遊記』大阪屋号書店刊 ,1930 年。
14. 米家 , 泰作「近代日本における植民地旅行記の基礎的研究：鮮満旅行」『京都大学文学部研究紀要』,2014 年。
15. 劉玲芳『「支那服」の流行；1920 年代の新聞記事から』日本語・日本文化研究 ,2016 年。

付記：

「支那」という言葉に関して、当時中国またはその一部の地域に対して用いられる地理的呼称。本論文においては、当時の通りに使用し、他の政治的な意味は一切含まれていない。

謝辞
本原稿の作成に当たり、黒澤亜里子先生にご指導をいただいたことをこの場を借りてお礼を申し上げたい。